

新鮮なデザイン

花き装飾コース

1. はじめに

私は、二年生前期花き装飾演習の授業で、フラワーアレンジメントなどの制作に現在多く使われている吸水性フォームは環境に悪く、花き装飾の本場であるヨーロッパでは吸水性フォームを使わないデザインへの移行が進んでいることを知った。また授業内でいくつか紹介された吸水性フォームを使わないデザインを見て、その個性的で「新鮮なデザイン」やアイディアに惹かれた。私も吸水性フォームを使わないデザインに挑戦すると共に、自身のデザインの引き出しを増やしたいと思い、卒業制作を通して挑戦することにした。

2. 制作作品および作品の概要

(1) 「Mystical tree」



この作品では宇宙のどこか他の惑星にある、生命力に満ち溢れ青色の花が咲き誇る神秘的で力強い大樹をイメージした。

吸水性フォームのかわりに試験管とカトレアピックを使用して保水した。ベースとなる朽木は中が空洞だったため、その中に試験管とカトレアピックを隠すようにした。また試験管から花が抜けないように、試験管と花茎をワイヤーで固定した。

(2) 「催花雨 ver. 1」



催花雨とは「春に早く咲けと花を急き立てるように降る雨」のことである。この作品では、催花雨というタイトルを通してまだ何も生えていない大地に雨が降り植物が芽生えていく様子や、現実の荒んだ心や環境が、優しい雨によって洗われていくように、物事の光と闇、そして闇に射す希望の雨をイメージした。吸水性フォームを使わないデザインとしては、プラスチック製の花瓶の底に

リボンを十字になるように置いてセロハンテープで止め天井から吊るした。サブになる花は、試験管に入れその試験管をテグスで固定し天井から吊るした。どちらもステムが見えにくいように中にリボンを入れた。リキュウソウやデンファレはステムティッシュをし上からフローラルテープを巻いて保水した。

(3)「催花雨 ver.2」



「催花雨 ver.1」と同じコンセプトで制作したのが「催花雨 ver.2」である。

吸水性フォームを使わないデザインとしては、メインになる花束は、大きめの試験管に、サブの花は小さめの試験管に入れてテグスを使用し固定し天井から吊るした。「催花雨 ver.1」ではステムが見えにくくなるように中にリボンを入れたが、一部ステムが見えてしまっていたため、この作品ではステムに直接リボン

ンを巻き付けた。リキュウソウやデンファレはステムティッシュをし上からフローラルテープを巻いて保水した。

3. 考察

「Mystical tree」や「催花雨」など大型の作品では、制作をしていく中で、試験管が固定できなかつたり、花瓶を思うように吊るせなかつたりなど、想定外の問題がたくさん起きて制作に時間がかかってしまうことが多くあった。このことから事前に固定方法を試したり、展示場所で前もって仮制作をしたりするなど、事前準備がとても大切だと感じた。

また「催花雨」の制作では、アンケートを実施したことにより今まで意見を聞くことのできなかった他コースの同級生や、事務の職員の方々からより一般の方と近い視点の意見を聞くことができた。フラワーデザインについての知識がある方は、コンセプトに沿っているか、細かい工夫はあるか、1つ1つのデザインの意義についての観点の意見が多かった。またフラワーアレンジがあまり身近でない方からは、作品の第一印象や、インパクト、全体の色合い、コンセプトのわかりやすさなどについての意見が多かった。このことから、作品の制作場所や作品を見る人がどんな属性なのか分析することが大切だと感じた。

全体を通して、「吸水性フォームを使わないデザイン」というところのみを統一して、様々なデザインの制作に挑戦した。デザインが思いつかず行き詰まることや、事前準備が不足していたことで当日の施工時間が想定より多くかかってしまうなど大変なこともあったが、浮かんだアイデアを形にすることや、多くの方の意見を聞くことができたことで、終始新鮮な気持ちで、楽しみながら作品と向き合うことができた。卒業制作を通して新しいことに挑戦することの楽しさや、やりがいや改めて知ることができた。この感覚を大切にして、就職してからでも忘れずにいたいと思う。